

氏 名 (国 籍)	テリー ジョイス (イギリス)		
学 位 の 種 類	博 士 (心 理 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 2756 号		
学位授与年月日	平成 14 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	心理学研究科		
学 位 論 文 題 目	The Japanese Mental Lexicon on : The Lexical Retrieval and Representation of Two-Kanji Compound Words from a Morphological Perspective (日本語心的語彙—形態素論の視点から漢字二字熟語の語彙検索と語彙表象—)		
主 査	筑波大学教授	教育学博士	太 田 信 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	海 保 博 之
副 査	筑波大学教授	博士 (教育学)	塚 田 泰 彦
副 査	筑波大学助教授	博士 (教育学)	茂 呂 雄 二

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、言語心理学アプローチにより、文字体系としての漢字機能について実験的に検討し、日本語心的語彙の構造と機能について明らかにしようとしたものである。論文は、3部より構成されており、第1部は、第1章、第2章、第3章より成っている。

第1章では、本研究の背景となる考え方を示すため、次の4つの領域、すなわち「日本語文字体系」「日本語の語句形成 (造語)」「視覚的単語認知」「心的語彙」について検討し、領域間の関連について考察を行なった。そして、漢字は形態素文字体系として機能しており、さらにその機能は日本語の心的語彙に反映していると考えられた。

第2章では、文字体系としての日本語漢字について先行研究について考察を行った。その結果、日本語の複数の表記や読みが文字体系の複雑さの原因であり、これにより漢字の分類をめぐる諸議論があったり、漢字の形態素的特質の理解を難しくしていることが判明した。

第3章では、日本語の造語過程について検討した。その結果、2字熟語の造語原則は、ほとんどが抽象的言語単位 (形態素) の結合とみなすことができ、漢字熟語の形態素論的特質が明らかになった。このことは、後述の実験計画を支える重要な根拠となっている。実験では、日本語心的語彙における2字熟語の検索と表象について、2字熟語の造語原則を実験条件として検討が行われている。

第1部が主に日本語文字体系の外的形態に焦点を当てたのに対して、第2部では、主に内的表象に焦点を当て、日本語心的語彙の構成における漢字の形態素的特性の意味について検討した。そして、日本語心的語彙モデルとして、Joyce (1999, in press) の「レンマ・ユニット・モデル」の日本語版が提唱された。レンマ・ユニットとは、いくつかの表象と意味単位と結合する媒介項である。このモデルの妥当性を検討するために、漢字2字熟語の形態素の視点からプライミング実験を計画し、さまざまな実験的検討を行った。

第2部は、第4章、第5章、第6章より成っている。第4章では、本研究で行われる実験の背景として、視覚単語認知研究についてレビューした。特に、心的語彙における語彙検索と語彙表記の問題について議論をした。

第5章では、廣瀬 (1992) の仮説と Joyes (1999, in press) のレンマ・ユニット・モデルのどちらかが妥当かを検討するためにひとつの調査と2つの実験が行われた。調査1では、漢字2字熟語の5つの造語原則に関する評

定調査が行われ、この結果に従って刺激材料を作成し、構成要素形態素プライミング実験を行った。実験1では、SOAが3000ms、実験2ではSOAが250msの条件で行った結果、レンマ・ユニット・モデルに有利な結果が得られた。

第6章では、レンマ・ユニット・モデルの妥当性をさらに検討するために、7つの実験とひとつの調査が行われた。まず実験3では、実験1、2での語彙判断課題に変えて、命名課題を用いて、実験1、2と同様のプライミング実験を行った。課題による実験結果への影響を検討するためである。ここでは、命名反応時間を計るため、ボイスキーを用いた波形データを使用した。結果は廣瀬の仮設に近いものであったが、それは命名課題が音韻情報にバイアスがかかる課題のためであると解釈された。

実験4、5では、仮名と漢字という表記様式をプライム刺激とターゲットでクロス（交差）させた場合のレンマ・ユニット・モデルの検討を行った。実験4では、プライム刺激の仮名が音の場合を、実験5では、プライム刺激の仮名が訓の場合を扱っている。

実験6、7では、聴覚提示と視覚提示という刺激提示様式を、プライム刺激とターゲットでクロスさせた場合のモデルの検討を行った。実験6では、プライム刺激を音読みの場合、実験7では、プライム刺激を訓読みの場合を扱っている。

実験4、5、6、7の結果は、概ね、レンマ・ユニット・モデルを支持するものであった。

実験1、2の結果で「動詞＋補足語」の造語原則の場合だけ「前の漢字」条件が「後の漢字」条件より反応時間が短かったので、この原因を追及するために実験8を行った。調査2は、この実験の刺激材料を統制するためのものであった。実験8の結果は、動詞の形態素的役割の重要性を示すものであった。

第6章の最後の実験として、これまでの実験におけるプライム刺激とターゲットを入れ換え、2字熟語をプライム刺激にした場合の実験を行った。その結果、これまでの8実験と同様に、レンマ・ユニット・モデルを支持する傾向が見出された。

本研究では、日本語の心的語彙を明らかにするために、漢字2字熟語の検索と表象に焦点を当て、いくつかの実験を重ねてきたが、今後の課題としては、実験手続き、実験材料、実験課題などの点で、さらに多方面よりレンマ・ユニット・モデルの妥当性を検討する必要がある。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、漢字2字熟語の語彙検索と語彙表象について、実験的検討をすることにより、日本語の心的語彙表象を明らかにしようとするものである。本研究の独自性は、この分野の研究数があまり多くないということもあり、多くある。漢字2字熟語を造語原則により、調査データに基づいて分類したこと、また、その原則のひとつについては、さらに「配置的敏感さ」という尺度を作成したこと、クロス・スクリプトやクロス・モダリティの場合のプライミング実験技法、そして何よりも、レンマ・ユニット・モデルの提唱が本研究の核となる研究成果である。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。